



👁️👁️ みどころ

「人質交渉人」なる職業のあるアメリカには、脱獄不可能と思われる刑務所からの脱獄を専門にする職業もあるらしい。もっとも、それにはバックの応援が不可欠だから、もしそれがなくなれば、そのプロも一生監獄に・・・？

CIAが絡んだり、イスラム教徒が絡んだりと刑務所内は大賑わい(?)だが、巨大タンカーの中に設置された刑務所という設定が面白い。肉弾相撃つ大活劇と知能ゲームの両方を本作で堪能したい。さらに、あっと驚く結末もお楽しみに・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■脱獄ものにハズレなし! ■

本作のプレスシートには「脱獄ものにハズレなし! ~傑作ぞろいの『監獄アクション』とタフガイ・スター」というコラムがある。「潜水艦ものにハズレなし」というのが私の持論だが、このコラムのように「脱獄もの」に焦点を絞って考えれば、確かにそのとおりだ。「脱獄もの」の最高峰といえ、誰もが『大脱走』(63年)を挙げるだろうが、確かにこのコラムに書いてあるように『パピヨン』(73年)も素晴らしかったし、B級映画ながら(?) スティーヴン・セガール主演の『奪還 DAKKAN -アルカトラズ-』(02年)なども面白かった。

そのうえ、本作はシルベスター・スタローンとアーノルド・シュワルツェネッガーという肉体派本格アクション俳優2人の本格的共演だから興味深い。「潜水艦もの」は作品によってストーリー展開がまちまちで、「成功もの」も「失敗もの」もあるが、「脱獄もの」は概ね成功して万々歳というものが多い。したがって、脱獄ものを面白くさせるかどうかの

ポイントは、出演者よりも脚本の出来だが、さて本作は？

■□■この設定はなかなか面白い、なるほど、なるほど・・・■□■

刑務所は犯罪者（囚人）を収容する施設だから、国営のもの。誰もそう考えるのが普通だが、小泉純一郎元総理による「郵政民営化」を考えれば、刑務所だって「民営化」が可能なのでは・・・？しかして、本作はその発想をさらに深化させ、世界の秩序を脅かす危険な重犯罪者のみを収容し、絶対に脱獄できないことを誇る、政府が関知しない民間運営の監獄を舞台とした。面白いのは、その監獄を巨大タンカー内の施設としたことだ。こうなると、『パピヨン』と同じように、いや囚人たちは巨大タンカー内にいることすらわからないのだから、『パピヨン』以上に脱獄は不可能・・・？

もう一つ面白いのは、シルベスター・スタローン扮するレイ・ブレスリンの職業をB&Cセキュリティの代表であるレスター・クラーク所長（ヴィンセント・ドノフリオ）の下で働く、刑務所のセキュリティに関する専門家であり、かつ脱獄のプロフェッショナルと設定したことだ。本作冒頭は、そんなブレスリンの「自己紹介」として、コロラド州ベンドウォーター連邦刑務所からブレスリンが鮮やかな脱獄を決めるシークエンスが紹介される。これを手助けするのは、ブレスリンの同僚でハイテク専門家のハッシュ（カーティス“50セント”ジャクソン）と、女性スタッフのアビゲイル（エイミー・ライアン）だが、そのお手並みは実にお見事。11月4日に観た『グラッド・イルージョン』（13年）では、あっと驚く手品を見せつけてくれる一方で、そのネタばらしもしっかりサービスしてくれたが、それは本作も同じ。

アメリカには「人質交渉人」なる職業があることを私は『ブルー・オブ・ライフ』（00年）（『シネマルーム1』6頁参照）、『交渉人 真下正義』（05年）（『シネマルーム7』369頁参照）、『崖っぷちの男』（12年）（『シネマルーム29』195頁参照）、『ホステージ（人質）』（05年）（『シネマルーム8』364頁参照）ではじめて知ったが、それと同じようにアメリカには刑務所からの脱獄可能性を身を持って証明することによって報酬を得る仕事があることを本作ではじめて知ることに。なるほど、なるほど・・・。

■□■CIAの着眼点は？会社のボスの着眼点は？■□■

本作の導入部はブレスリンが一人主演として登場し、アーノルド・シュワルツェネッガー一扮するエミル・ロットマイヤーが登場するのは一通りの状況設定が終わってからになる。ストーリーが大きく転換するのは、冒頭にみたブレスリンの鮮やかな脱獄のお手並みに感心したというCIAの女性弁護士ジェシカ・マイヤー（ケイトリオーナ・バルフェ）からブレスリンに対して、前述した「政府が関知しない民間の極秘刑務所の脱獄」という依頼が入ること。近時キューバのグァンタナモ収容所が有名になったが、CIAとしては、このような監獄にCIAが関知していることは極秘にしたいところ。したがって、「それはあ

くまで民間の施設だよ」と言い逃れしたいわけだが、そんな屁みたいな理屈が通用するの？

戦後69年もの間、平和に完全に馴れてしまい、国際紛争や国際的テロに対して無頓着になっている日本人にはなかなか理解できないが、アフガン戦争イラク戦争などの国際紛争や、2001年の9.11テロを体験してきたアメリカ人にはCIAの存在も当然だし、本作が設定したような刑務所の存在も当然だと容認できるらしい。さらに、アメリカ人は何でもビジネスとして割り切るのが得意だから、500万ドルという高額の報酬に、クラークの心は大きく動かされたい。もちろん、この手の仕事はクラークからの社長命令にブレスリンがしぶしぶ従うというわけにはいかないため、あくまでブレスリンの意思が尊重されたが、意外にもブレスリンはすんなりと決断！

ブレスリンはいつものとおり①“ポルトス”という偽名②偽の経歴③緊急時の避難コードを頭に叩き込んだうえ、腕に発信機を埋め込んで出発。しかし、すぐに何者かの車に拉致されてしまったブレスリンの腕からは直ちに発信機が取り外されてしまったから、ブレスリンの位置情報は消滅。今回の仕事は、今までのものとはちょっと勝手が違うのでは・・・？



Motion Picture Artwork © 2013 Summit Entertainment, LLC. All Rights Reserved.

■□■この著書から何を学び、どう活用？■□■

ブレスリンが閉じ込められたガラス張りの独房は24時間監視状態だから、これでは手も足も出ない。この工夫は刑務所長ホプス（ジム・カヴィーゼル）が「矯正施設の管理体制の問題点」という著書から学んだものだが、何とこの本の著者がブレスリンというから恐れ入る。ホプスの尋問を受けたブレスリンはすぐにこれは異常事態だと気づき「緊急コ

ード」を告げたが、ホブスには何の反応もなし。アレレ、こりゃクラークとの打ち合わせと大きく食い違ってるのでは？ひょっとして、俺は罠にはめられたのかな・・・？

そんな状況下において、受刑者がたむろする「バビロン」という広場でプレスリンが出会うのが、ひげ面の大男、エミル・ロットマイヤーだ。以降、この2人が反発し合いながらも互いの立場と能力を理解し、相協力して刑務所からの「大脱出」を目指すのが本作のメインストーリーになっていく。

■□■「大脱走」の3つのポイントは？■□■

本作が見せる「大脱出」に向けてのポイントは3つある。その第1は、施設の構造。冒頭の脱獄シーンでもプレスリンの観察眼には驚かされたが、ホブス所長の厳しい監視下での危機的状況においてもプレスリンの観察眼はいささかも揺るぎがないから、それに注目。もっとも、「ホットボックス」と呼ばれる灼熱地獄の中で、床板のネジを外す方法を発見するとか、甲板に出て六分儀を使うことによって、自分たちの位置の緯度・経度を測るという行動を見ていると、プレスリンは単なる肉体派ではなく、相当の学者であることも明らかだ。第2は、看守の行動把握。これも第1と共通する観察眼がポイントだが、この点でもとにかくプレスリンの観察眼の鋭さには驚くばかりだ。第3は協力者の確保で、これが本作最大のポイントになる。その最初の協力者になるのが、ロットマイヤーだが、本作にはさらにカイリー医師（サム・ニール）や、イスラム教信者の囚人ジャバド（ファラン・タヒール）の2人がキーマンになるから、その協力ぶりに注目したい。

本作ではそんな「矯正施設の管理体制の問題点」どおりの手順で「大脱出」をはかろうとするプレスリン、ロットマイヤーの動きと、その阻止をはかろうとするホブス所長との知恵比べが見モノだが、私に言わせればホブス所長の勉強不足が目立っている。ホブスはいかにも冷静沈着に部下のドレック（ヴィニー・ジョーンズ）らに次々と指示を下しているが、なぜ「協力者の確保」という鉄則を阻止しないの？つまり、本作を観ていると、いくらプレスリンやロットマイヤーに懲罰を加えても、日々の行動での意思疎通はかなり自由にさせているから、ホブスは何よりもこれを遮断し、孤立化を図るべきなのでは？治安維持法があった戦前の日本では、囚人をこんなに自由に団欒させたり、おいしいような食事を振る舞うことはなかったはずだが・・・。

■□■誰と誰がグル？あっと驚く結末をお楽しみに！■□■

冒頭の脱獄シーンではプレスリンの鮮やかなお手並みのみが際立っていたが、実はそのバックにはB&Cセキュリティ社との密な連絡と協力があったことが種明かしされる。そして、今回プレスリンが挑もうとする民間運営の極秘刑務所からの脱獄についても、B&Cセキュリティ社のバックアップがあることが前提だった。さらに、万が一の事態になっても、緊急時の避難コードを伝えれば「ゲーム・イズ・オーバー」となって、プレスリンは釈放される段取りだった。ところが、今プレスリンが直面している事態はそれとは

全く異なるものだったから大変だ。したがって、本作の中盤以降はプレスリンがロットマイヤーと協力していかかに「大脱出」を成功させるのかというテーマの他、プレスリンをワナにハマたのは一体誰だというテーマも浮上してくる。

クラークを社長とするB&Cセキュリティ社のチームは一枚岩のように見えたし、アビゲイルは鬱陶気的にプレスリンの「彼女」のように見えたが、さて・・・？私が大いに気になるのは、500万ドルという今回のプロジェクトの報酬の分け前がB&Cセキュリティ社内でどうなっているのかということだ。いくら仲良くチームプレーができていても、報酬の分け前でモメたりすれば、団結にヒビが入るのは必至。他方、新米としてクラーク所長の刑務所に入ってきたプレスリンに対して、最初からやけに親しげにチョッカイを出してきたのがロットマイヤーだが、彼の狙いは一体ナニ？それが明らかにされないまま、脱獄という一つの目標のみで一致したプレスリンとロットマイヤーのチームが結成されるわけだが、互いに互いの身分・立場を知らないわけだから、いつその内部に亀裂が入り、対立してしまうかもしれないのは当然だ。

『パピヨン』でみた海の上にポツンと浮かぶ孤島も「こりゃ到底脱出不可能！」と思わせたが、全長300mにも及ぶ、海の揺れすら全く感じさせない巨大タンカーの中に設置された刑務所も、それだけで「こりゃ到底脱出不可能！」と思わせるに十分だ。しかも、懲罰隔離房に入れられるためにあえて騒動を起こしたのも、大脱出への一つの布石だったことを知ったホブス所長はプレスリンへの締めつけ（痛めつけ）を強化していったから、プレスリンは今や絶対絶命・・・？そんな極限の状況下で決行される「大脱出」のアクションと知能戦に注目！しかし、プレスリンをワナにハマたのは一体誰？そして、誰と誰がグル？さらに、大脱出の成功後に明かされる、あっと驚く結末をお楽しみに！

2013（平成25）年11月29日記

村上水軍よ、永遠なれ！

1) 愛媛県松山市生まれの私は、瀬戸内海に浮かぶ向島、因島、生口島、大三島、伯方島、大島の名前をよく知っている。これらは今でこそ、尾道と今治を結ぶ瀬戸内しまなみ海道によって結ばれているが、「因島」「来島」「能島」三家に分かれた村上水軍が活躍した戦国時代には、小船で行き交うだけの孤島だった。

2) ところが今は、大島にある村上水軍博物館は今年の倍近い人出で、居城跡への観光船も満席。それは和田竜の小説『村上海賊の娘』が本屋大賞を受賞した

うえ、村上水軍の血を引く少女らが隠し財産を探す映画『瀬戸内海賊物語』が5月に全国公開されるためだ。

3) 4月26日の和田竜の講演会には、1576年の「第1次木津川口合戦」で毛利方について織田信長と戦った村上三家の子孫も訪れた。戦い後、来島村上家が秀吉側に寝返ったのを機に、三家は袂を分かったから、一堂に会するのは440年ぶり。今は生業についているはずの(?)村上水軍よ、永遠なれ！

2014（平成26）年5月7日記